

鹿児島県甌島方言のアクセント

窪 蘭 晴 夫 *

The Accent of Koshikijima Japanese

Haruo KUBOZONO*

SUMMARY: This paper describes the prosodic system of Koshikijima Japanese, which is an endangered dialect spoken in the south of Japan, off the mainland of Kagoshima. This dialect resembles its sister dialect, Kagoshima Japanese, in several ways: It has a two-pattern prosodic system where words display only two tonal patterns; The domain of accent/tone assignment is the syntactic phrase known as *bunsetsu* rather than the word; Compounds inherit the tonal pattern of their initial morpheme. On the other hand, Koshikijima Japanese has developed its prosodic system in several unique ways. First, three-mora or longer words exhibit two high tones, or two pitch peaks. Second, this system relies both on the mora and the syllable, with the second high tone assigned to a particular *mora* at (or near) the end of the word and the first high tone linked to one or more *syllables* at the beginning of the word. Finally, this dialect has a high tone deletion rule whereby the second high tone of each word/phrase is deleted in non-final positions of the sentence.

キーワード：甌島方言, アクセント, 重起伏, 音節, 拍, 2型アクセント

1. はじめに

本論文は鹿児島県の離島で話されている危機方言の一つである甌島方言^{こしきじま}について、そのアクセント体系を記述するものである。甌島は東シナ海に浮かぶ離島であり、上甌島・中甌島・下甌島の3つの島からなる列島である（本稿では単に「甌島」と略す）。本土から西に約40 km、本土の串木野港からフェリーで1～3時間半のところにある。昔は船で5時間以上かかったそうであるが、今ではフェリーに加えて高速船も運航している。とは言うものの、今でもフェリーと高速船あわせて1日4往復しかない。平成の大合併によって薩摩川内市（旧川内市）の一部となったが、それ以前は鹿児島県薩摩郡〇〇村という地名であった。

島には平地が少なく、入り江ごとに十余の集落が点在している。道路が整備されるまでは、小舟が集落と集落を結ぶ主な移動手段であったらし

い。集落は小さいもので十数戸、大きい集落（里、中甌、手打）でも数百戸という規模である。現在の島の人口は約6千人であるが、本土から移り住んだ人も少なくなく、伝統的な方言を話しているのはその約半数と推定される。島には昔も今も高校がないため、子供たちは中学校を卒業すると島を離れ、学校を卒業してから帰郷する率も高くない。若い世代への方言の伝承もほとんどなされておらず、現在の50歳前後が最後の伝統方言話者となる可能性が高い。典型的な危機方言である。

甌島方言のアクセントについては上村孝二氏の研究が数少ない先行研究と言える。同氏は上甌島中甌集落¹⁾の出身であり、昭和12年に行った全島調査をもとに甌島のアクセント体系を記述している（上村1937, 1941）。筆者は他の研究者と合同で甌島方言アクセントの調査を進めているが、集落間の差異も小さくないため、本稿では特に下甌島の南端にある手打集落（人口約900人）の中

* 国立国語研究所教授（Professor, National Institute for Japanese Language and Linguistics）

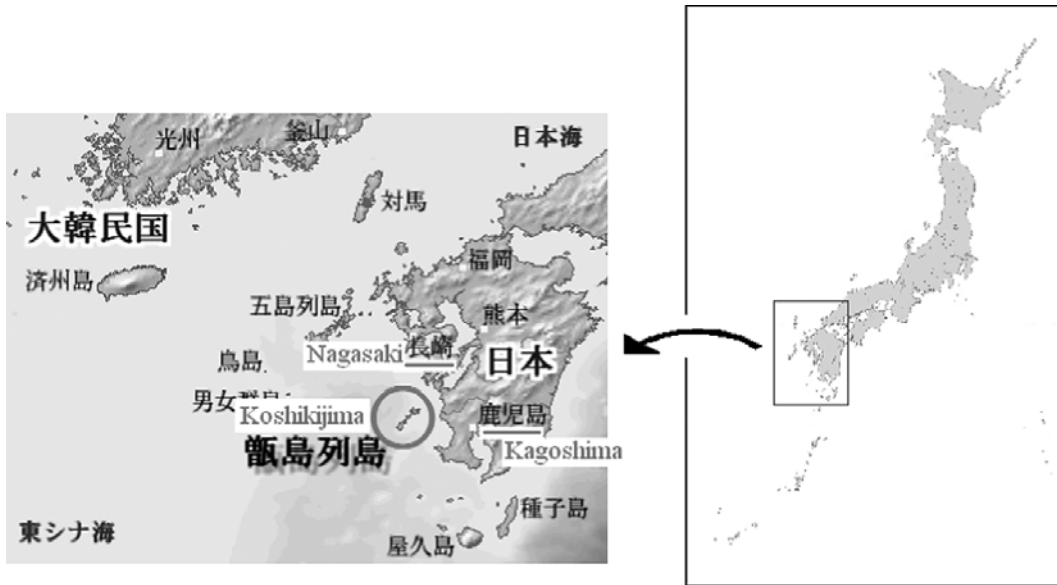


図1 甌島列島

年層に焦点をあてて、そのアクセント体系を報告する（以下、現在の甌島方言の記述は手打集落のアクセントである）。本稿で報告する調査は上村氏の調査とは約70年の時差があることになる。

本稿の構成は次のとおりである。次節（2節）で2型アクセント体系としての骨格を略述した上で、姉妹方言である鹿児島市周辺の方言（以下「鹿児島方言」と略す）との異同を中心に、音調実現範囲（3節）、音調付与単位（4節）、複合法則（5節）を記述する。続く6節では文レベルの音調現象に視点を移し、いわゆる「言い切り形」と「接続形」の間に観察される興味深い現象を紹介する。最後の7節では、甌島方言の主要特徴をまとめ、今後の研究課題を略述する。

2. 2型アクセント体系

甌島方言は長崎方言（坂口2001）や鹿児島方言（平山1951、木部2000）と同じく、語の長さに関わらず2つのアクセント型しか許容しない2型アクセント体系を持つ（上村1937, 1941）。語が長くなるにつれてアクセントの型が増える多

型アクセント体系ではなく、語の長さに関わらずアクセント型の数が固定的なN型アクセント体系に区別されることになる（上野1984、Uwano1999）。

甌島方言のアクセント型を、長崎方言や鹿児島方言にならってA型、B型と呼ぶことにする。2拍名詞であれば類別語彙（金田一1974）の第2類と第3類の間でアクセント型が分かれ、名詞では第1類と第2類がおおむねA型、第3～5類がおおむねB型となる。これは長崎方言や鹿児島方言と同じ特徴であり、よって両方言とアクセント型の所属語彙がほぼ同じとなる。

(1) A型：鼻、型、飴、夏、冬、赤、母、川、牛、杉…

B型：花、肩、雨、春、秋、青、父、山、馬、松…

3拍名詞についても類別語彙との対応が見られ、おおむね第1～3類がA型、第4～7類がB型となる。

- (2) A 型：形，女（おなご），桜，力…
 B 型：男，命，心，頭，ねずみ…

甌島方言は語末から数えるところも鹿児島方言と似ており、A 型は語末から数えて 2 つ目が高く、B 型は語末が高い。一方、音節単位ではなく拍単位で語末付近の高音調（H）位置が付与される点と、長い語に重起伏（二つのアクセントの山）を持つ点の 2 点において鹿児島方言と大きく異なっている。拍単位の付与については後述することとして（4 節）、ここでは 2～4 拍名詞の音調を例示する。アクセントの型は名詞だけでなく動詞や形容詞についても同じである。以下、[の記号はピッチの上昇地点を、また] は下降地点を表す。たとえば「お[な]ご」は、「おなご」と同じ音調を表す。B 型では二つ目の山（ピッチ上昇）が顕著に出るが、A 型ではピッチの下降ほどには二つ目の上昇は顕著ではなく、たとえば「[あ]ま[ざ]け」は「[[あ]ま[ざ]け」と記述した方がより適切かもしれない。

- (3) A 型
 [あ]め（飴），お[な]ご（女），
 [あ]ま[ざ]け（甘酒）

- (4) B 型
 あ[め]（雨），[お]と[こ]（男），
 [あさ]が[お]（朝顔）

これらの例からもわかるように、A 型では 4 拍以上の長さの語彙に、B 型では 3 拍以上の語彙に重起伏（複数のアクセントの山）が現れる。この特徴は、重起伏を持たない鹿児島方言の音調（5）-（6）と比べるとよくわかる。甌島方言では、語が長くなると語頭部分に二次的な高音調が出現すると言える。

- (5) A 型
 [あ]め（飴），お[な]ご（女），
 あま[ざ]け（甘酒）

- (6) B 型
 あ[め]（雨），おと[こ]（男），
 あさが[お]（朝顔）

自律分節理論（Autosegmental Theory; Goldsmith 1976, Haraguchi 1977）流に言うとも、鹿児島方言は A 型=LHL, B 型=LH というメロディーを持ち、甌島方言は語頭に H 音調が付与された A 型=HLHL, B 型=HLH というメロディーを持つとみることができる。いずれの方言においても、語末に L を持つか（A 型）、持たないか（B 型）という点においてアクセントの型が区別されている。これらのメロディーは語末から語頭に向けて付与されており、短い語ではメロディーの前半の音調が連結（link）されず、逆に長い語ではメロディーの最初の音調が語頭の複数の拍（または音節）に拡張（spread）されることになる。（7）-（8）に甌島方言の例をあげる。

- (7) あめ あまざけ なつやすみ
 | | | | | | \ | | |
 H₁L₁H₂L₂ H₁L₁H₂L₂ H₁L₁H₂L₂

- (8) あめ あさがお はるやすみ
 | | \ | | | \ / | |
 H₁L₁H₂ H₁L₁H₂ H₁L₁H₂

ここで 1 拍語のアクセントについて付言する。鹿児島方言では（9）のような 1 拍語の単独形でもアクセントの対立が保持されており、A 型は下降調で、B 型は中平調で発話される。これに対し甌島方言では 1 拍語の対立が保持されておらず、単独発音ではアクセントの中和が起こっている²⁾。同じ甌島方言において、（10）のような 1 音節 2 拍語が対立を示すのとは対照的である³⁾。

- (9) A 型：日，葉，柄，氣，詩（死），五（語）
 B 型：火，齒，絵，木，四，碁

- (10) A 型：[と]お（十），[ば]ん（晩），
 [き]ん（金），[ぼ]う（棒）

B型：と[う（塔），ば[ん（番），ど[う（銅），
い[ん（犬）

3. 語か文節か

甌島方言では他の多くのN型アクセント体系と同じように、文節を領域として基本メロディーが実現され、文節のアクセントはその中の自立語のアクセントによって決まる⁴⁾。甌島方言では鹿児島方言と同じように、同じ名詞であれば、その単独形と名詞+助詞が同じアクセント型となる。言い換えるならば、文節の初めに来る要素（通常は名詞や動詞などの自立語）のアクセント型が文節全体に継承されることになる（詳しくは5節参照）。

(11) A型

飴：[あ]め，あ[め]が，[あ]め[か]ら，
[あ]め[か]ら]も
する：[す]る，[し]た，し[た]ら

B型

雨：あ[め]，[あ]め[が]，[あ]め[か]ら，
[あ]め[か]ら]も
来る：く[る]，き[た]，[き]た[ら]

また拍数とアクセント型が等しい文節⁵⁾であれば、その内部構成に関わらず同じ音調を持つ（つまり上野氏（本特集）の言う「系列化」の特徴を持つ）。その際、1拍の助詞が2個続いた場合も、2拍助詞が1つの場合も同じである。次にA型で4拍の文節を例に示す。

(12) 4拍名詞：[あ]ざ[ら]し

3拍名詞+1拍助詞：[お]な[ご]が
2拍名詞+2拍助詞：[あ]め[か]ら（飴から），
[あ]め[で]も（飴でも）

4. 音節か拍か

4.1 音節と拍

重起伏を持つ点において甌島方言は鹿児島方言

と決定的に異なっているが、さらに音調付与の基本的単位においても顕著な違いを示す（Kubozono 2010, 2011c, 2012）。鹿児島方言は周知のように音節単位に音調が付与され、B型は（14）のように文節末の音節、A型は（13）のように、その一つ前の音節が高く発音される。

(13) [バ]レー，けだ[も]の，け[だ]もん，
ワ[シン]トン

(14) [ほん（本），にわと]り，にわ[と]い，
せん[せい]

これに対し甌島方言では、二つの山（語頭から出現順にH₁とH₂と表す）の位置は異なる尺度で決まってくる。まず語末付近に出現するH₂に注目すると、H₂は原則として1拍のみに実現し、A型では語句末から二つ目の拍が、B型では語句末の拍が高くなる。それゆえ鹿児島方言と違い、「けだもの」と「けだもん」、「にわとり」と「にわとい」ではH₂の位置がそれぞれ同じである。

(15) バ[レ]ー，[け]だ[も]の，
[け]だ[も]ん，[ワ]シン[ト]ン

(16) ほ[ん]，[にわ]と[り]，[にわ]と[い]，
[せん]せ[い]

一方、語頭に現れるH₁の範囲は音節単位に決まっており、H₂との間に1音節だけ低い部分を作る形でH₁の領域が決まる。つまり、H₁とH₂の間の低い部分（L₁）が1拍ではなく1音節と定まることにより、H₁の領域も音節単位で付与されることとなる。たとえば「ワシントン」というA型語彙では、語末から二つ目の拍（ト）が高くなり、その一つ前の音節（シン）が低くなり、さらにその前の音節（ワ）が高く発音される。このことは、次の例からもわかる（(17)はA型、(18)はB型の語句）。

- (17) [にぎ]り[め]し, [に]ぎい[め]し (握り飯)
 [かざ]り[も]の, [かざ]り[も]ん,
 [か]ざい[も]の, [か]ざい[も]ん (飾り物)

- (18) [せん]せ[い], [せん]せい[が],
 [せんせい]か[ら]
 [にわ]と[り], [にわ]と[い],
 [にわと]り[が], [にわ]とい[が]

4.2 H 音調の移動

このように甌島方言では、一つの語句の中で H₁ は「音節」を、H₂ は「拍」を単位として音調が付与される。これ自体複雑なシステムであり、H₁ と H₂ が異なる原理によって生じていることを示唆しているが、この方言ではさらに、A 型において H₂ の位置に制限が生じる。具体的には、A 型の H₂ が特殊拍に付与されることはなく、語句末から 2 つ目の拍が特殊拍である場合には H₂ は一つ前の拍に移動する。これは上村 (1941) で指摘されていることであり、70 年前の体系で既に起こっていた。

- (19) [パ]ンツ, [ポ]ット, [プ]ール, [ラ]イト,
 [きょ]うし (教師), [て]んき (天気)

H₂ の移動は次のような語例からもわかる。

- (20) バ[レ]ー, バ[レ]ーが, *[バ]レ[ー]が
 [け]だ[も]ん, [け]だ[も]んが,
 *[け]だ[も]んが
 [チョ]コ[レ]ート, *[チョコ]レ[ー]ト,
 [チョコ]レー[ト]が

この H 音調移動を表すと次のようになる。

- (21) バ[ン]ツ → [バ]ンツ

特殊拍が単独で高音調を持つことができないのは、東京方言において特殊拍がアクセント核を担うことができないという (21) の現象と同じ性格

のものともみることができる。つまりアクセント (音調) 規則によって高音調が付与される位置がたまたま特殊拍となる場合には、その一つ前の拍 (言い換えると特殊拍と同じ音節の自立拍) に高音調が移動する。

- (22) サ[イ]ダー → [サ]イダー
 ロ[ン]ドン → [ロ]ンドン

甌島方言でも東京方言と同じ現象が起こっていると思われるが、甌島方言に特徴的なのは、この移動現象が A 型のみで生じるということである。B 型の語句では、自立拍であろうが特殊拍であろうが、語句末の拍に H₂ が付与される。

- (23) [み]か[ん], [み]かん[が],
 [ト]タ[ン], [ト]タン[が],
 [ご]ほ[う], [ご]ほう[が],
 [せん]せ[い], [せん]せい[が],
 [にわ]と[い], [にわ]とい[が]

A 型と B 型を比較してみると、「特殊拍が単独で高音調 (H) を担えるのは語末のみ」という記述的一般化が可能であるが、このような形で A 型と B 型の間に非対称性 (asymmetry) が生じるのはなぜであろうか。一つの可能性として、非対称性の原因は B 型の方にあり、基本メロディーが HLH であるために、B 型では H の移動が起こり得ないという説明が成り立つ。たとえば「にわとい」では、仮に A 型の語彙のように H の移動が起こると HLHL という A 型のメロディーを持つてしまう。これでは、B 型の語彙が A 型のメロディーを持つてしまうことになる。

- (24) a. [にわ]と[い] → b. *[に]わ[と]い

このことを機能的な観点から見ると、B 型語彙における H 音調移動は A 型と B 型の中和を引き起こしてしまう。(24b) に示した音調は「けだもん」のような A 型の音調であり、B 型の H 移

動によってアクセント型の区別が失われてしまうのである。これは「みかん」のような短い語の場合でも同じで、語末の特殊拍がH₂を担えなくなると、A型の語彙（たとえば「時間」）と区別できなくなる。

(25) [み]か[ん→*み[か]ん (vs. A型 じ[か]ん)

このように見てくると、特殊拍をめぐるA型とB型の間に非対称性が生じるのは、アクセント型の合流を避けるためであり、アクセント型の区別を維持するためにB型ではH音調の移動が許されないということが推測できる。

ここで議論を少し整理すると、甌島方言ではH₁とH₂の間に基本的な違いが見られ、H₁は音節を単位として、H₂は拍を単位として付与される。またH₂が拍単位で付与されるとしても、A型では特殊拍がH₂を担うことは許されず、語末から二つ前の拍が特殊拍の場合には、H₂は一つ前の拍に移動する。

一見すると複雑な体系であるが、このような特異な構造が重起伏のアクセント体系の一般的な特徴ではないことを強調しておきたい。重起伏という特徴を持つことと、音節と拍の両方に依存するということがまったく独立した現象であり、また特殊拍が（部分的に）高音調を担えないということにも何ら必然性があるわけではない。その証拠に、甌島と同じように重起伏を許す喜界島中里方言を見てみると、H₁もH₂も一貫して拍単位で付与され、さらに特殊拍であってもH₂を担うことができる（窪蘭 2011b）。たとえば外来語の多くは甌島方言でも喜界島中里方言でも単独発音（言い切り形）では語末でピッチが下降するアクセント型——甌島方言のA型、喜界島方言のβ型（上野 2002）——をとるが、これらのアクセント型は語末から二つ目の拍が高く、その一つ前の拍が低く、そしてそれより前の拍がすべて高く発音される（ここでは文末形を記述する）。この違いは(26)と(27)を比較するとよくわかる。

(26) 喜界島中里方言

[タン]バ[リ]ン, [ワシ]ン[ト]ン,
[エレベ]ー[タ]ー, [チョコ]レ[ー]ト

(27) 甌島方言

[タン]バ[リ]ン, [ワ]シ[ン]ト[ン],
[エレ]べー[タ]ー, [チョ]コ[レ]ート

4.3 H₁とH₂の連動

ここでH₁とH₂の関係および機能を考えてみよう。H₁とH₂の間に常に1音節存在するということは、H₁とH₂が連動することを意味する。H₂は常に1拍に実現し、その位置はA型でもB型でも語句末から計算される。そのH₂と連動する形でH₁が現れているのである。1語に複数のH音調が現れ、そこに連動が見られるのは別にこの方言だけに見られる現象ではない。同じ現象が上記の喜界島中里方言にも見られ、またアフリカのShona語にも観察されるという(Myers 1990)。甌島方言に特異的なのはH₁とH₂が音節と拍という異なる単位で付与されるということであろう。

歴史的にみると、H₁が音節を単位とするということと、H₁とH₂が連動するということが、甌島方言において比較的新しい現象のようである。70年前の上村(1937, 1941)の記述では、H₁は短い語(28a)ではH₂と連動するよう見えるが、長い語(28b)では連動せず、語頭の2拍目に固定されている(()内は現在のアクセント)。つまり、70年前の体系ではH₁とH₂は連動せず、いずれも拍を単位として付与されていた。基本的にいずれの音調も1拍に実現していたのである。これに対して70年後の現在ではH₁がH₂に連動し、かつH₁が拍ではなく音節を単位として付与されている。H₁がH₂に連動するようになったということは、後述する文レベルのH₂消去規則(第6節)を考える上で、重要な意味を持つてくる。

(28) a. [あ]ま[ざ]け ([あ]ま[ざ]け)

に[わ]と[い] ([に]わと[い])

b. な[つ]や[す]み ([な]つや[す]み)

む[か]しば[な]し ([むかし]ば[な]し)
 は[る]やす[み] ([はるや]す[み])
 い[ろ]えんび[つ] ([いろえん]び[つ])

H₁がH₂に連動するようになったことと、H₁が拍単位から音節単位へ変化したこととは無関係ではないと思われるが、両者の間に論理的な必然性があるわけではない。(26)に示した喜界島中里方言のように、H₁が(H₂と同じように)拍を基調としながら、H₂と連動する体系も存在する。一方、H₁が拍単位から音節単位へと付与範囲を変えたとしても、必ずしもH₂と連動する必要性はない。H₁が音節単位で実現し(たとえば語頭の1音節だけに実現し)、H₂とは何ら連動しないという選択肢もあったはずである。

5. 複合法則

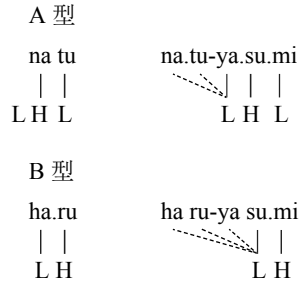
甌島方言は上村(1941)の記述でも現在の体系(Kubozono 2012)でも、鹿児島方言や長崎方言と同じ複合法則に従う。すなわち、文節初めの形態素がA型であれば文節全体がB型アクセントとなり、文節頭がB型の形態素であれば文節全体がB型アクセントとなる。「複合語全体」ではなく「文節全体」と言ったのは、たとえば名詞+名詞の複合名詞と、名詞+助詞の文節が同じ規則に従うからである。鹿児島方言と比較して示すと次のようになる。

(29)	鹿児島方言	甌島手打方言
A型		
女	お[な]ご	お[な]ご
女が	おな[ご]が	[お]な[ご]が
女言葉	おなごこ[と]ば	[おなご]こ[と]ば
B型		
男	おと[こ]	[お]と[こ]
男が	おとこ[が]	[おと]こ[が]
男言葉	おとここと[ば]	[おとこ]こと[ば]

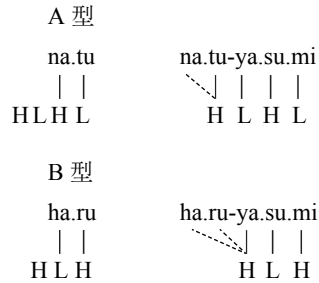
基本メロディーを基底に考えると、鹿児島方言

では(30)のように、甌島方言では(31)のようにHとLの付与がなされることになる。いずれの場合も、長い語句では基本メロディーがすべて付与されるが、短い語句では一部しか付与されず、残りの音調は実現されない。

(30) 鹿児島方言



(31) 甌島方言



6. 文レベルの音調変化

6.1 事実

4節で、現在の甌島手打方言ではH₁とH₂が連動し、両者の間には1音節の低音調が現れることを見た。A型でもB型でもH₂の位置が語句末から計算されるため、H₁の実現範囲はH₂の位置が決まらなると決まらない。つまりH₁の範囲はH₂の位置によって決まり、H₂の位置を決めずにH₁を決めることはできない。それゆえ、H₁の実現範囲は語の長さによっても変わり、また音節構造(語末付近に特殊拍があるかどうか)によっても変わる。A型の語句で示すと次のようになり、A型だから語頭から何音節が高くなるというような一般化はできない。

- (32) [あ]ま[ご]け, [あま]ご[け]が
 [け]だ[も]の, [けだ]も[の]が,
 [け]だ[も]んが
 [なつ]や[す]み, [なつや]す[み]が,
 [なつやす]み[か]ら

このように H₁ の範囲は H₂ の位置に依存するのであるが、奇妙なことに文発話においては文末文節を除き、H₂ が消えてしまう⁶⁾。つまり、非文末位置の文節では H₁ だけしか実現しなくなってしまう（#は文節境界を、句点（。）は文末を示す）^{7,8)}。

- (33) a. [あ]ま[ご]け。
 [あ]まごけ#や[ね]え。
 あ[ま]か#[あ]まごけ#や[ね]え。
 b. [け]だ[も]の。
 [け]だ[も]の[が]。
 [け]だ[も]んが。
 [け]だ[も]のが#よ[か]。
 [け]だもんが#よ[か]。
 c. [わ]たしの#な[ま]え。
 [わ]たしの#[な]まえは#[や]ま[だ]。
 [わ]たしの#[な]まえは#[や]まだ#[は]
 な[こ]。

母語話者の直感を尋ねてみると、非文末位置では H₂ が消えなくても必ずしも不自然ではないという。一方、文末位置あるいは単独発話において H₂ が消えると非常に不自然に聞こえるという。たとえば (33a) の文が (34) のように発音されても大きな違和感はないが、(32) の語が単独（あるいは文末で）発話されるときに (35) のようになるとおかしいというのである。

- (34) ?[あ]ま[ご]け#や[ね]え。

- (35) *[あ]まごけ。*[なつ]やすみ。

文レベルの発話において非文末文節の H₂ が消えてしまうというのは非常に奇妙な現象といわざ

るを得ない。語彙レベルにおいては H₂ が H₁ を支配しているながら、文レベルでは逆に H₁ が支配的となり、H₂ は消えてしまうのである。語彙レベルと文レベルで支配関係が逆転してしまうことになる。

このことは H₁ と H₂ の機能を考えてみるとよくわかる。語彙レベルでは H₂ が弁別的役割を果たし、その位置によって A 型と B 型の区別がなされる。一方、文レベルでは（文末を除き）H₂ が消えてしまうため、H₁ が弁別的役割を果たす。文レベルにおける H₂ の役割は文末か否かを示すだけであり、H₂ があればその文節は文末にある——すなわち、その文節で文が終わる——ことを示し、H₂ が実現しなければ文末ではないということを示す。語彙レベルと文レベルでアクセントの弁別機能が H₂ から H₁ へ移行することになる。(36) と (37) にこの違いを示す。

- (36) 語彙レベル (= 文末)
 A 型 [なつ]や[す]み。
 B 型 [はる]や[す]み。

- (37) 文レベル
 A 型 [なつ]やすみ#や[ね]え。
 B 型 [はる]やすみ#や[ね]え。

6.2 通時的考察

文レベルにおいて H₂ が消えてしまう現象は、70 年前の上村（1941）の記述には現れてこない。上村の記述では、語彙レベルにおいても A 型、B 型ともに、H₂ の方が H₁ より卓立しているとあり、この点においても現在の特徴とは異なる（2 節で述べたように、少なくとも A 型では H₂ より H₁ が音声的に卓立している）。これらの事実を総合的に考えると、文レベルで H₂ が消えてしまう現象は、この 70 年間に起こった現象であることが想像できる。では、どうして文レベルにおいて H₂ 消失という奇妙な現象が起こったのであろう。その理由を考えてみると、その背後には H₁ と H₂ の連動という語彙レベルの音調変化がある

ように思われる。

既に述べたように、70年前の体系では H_1 は H_2 からほぼ独立した形で生じていたが（(28) 参照）、現在では H_2 に連動する形で起こる。このことを念頭において、70年前の甌島方言でも H_2 の消去が起こっていたと仮定してみると、この体系では文末以外の位置において A 型と B 型が融合してしまうことがわかる。たとえば (38) の例では、A 型の「夏休み」と B 型の「春休み」が同じアクセント型になってしまう。

- (38) A 型 な[つ]や[す]み。
 な[つ]やすみ#や[ね]え。
 B 型 は[る]やす[み]。
 は[る]やすみ#や[ね]え。

一方、現在の体系では H_1 と H_2 が連動し、たとえ H_2 が消えても H_1 が弁別機能を担うことができる（(37)）。このようにみると、70年前の体系では H_1 と H_2 が連動していなかったため H_2 の消去は許されなかったが、現在の体系では H_1 と H_2 が連動しているため、文レベルの H_2 消去が許されるようになったことがうかがえる。 H_1 （と L_1 ）の実現範囲が変化したことにより H_2 消去が起こる条件が整った、つまり、語彙（文節）レベルの音調変化が文レベルの音調変化を可能にしたという解釈である。ただし、前者は後者の必要条件であるが十分条件ではない。 H_1 が H_2 と連動するからといって、 H_2 が消去されなければならないという論理は成り立たない。文レベルにおける H_2 消去には別の独立した要因があったはずであり、その要因が働く条件を整えたのが H_1 と H_2 の連動と考えたほうがよさそうである。

6.3 語音調と文音調

以上見てきたように、現在の甌島（手打）方言では H_2 が語彙レベルで H_1 を支配しながら文レベルでは H_1 が H_2 を支配するという奇妙な関係が観察される。本稿では H_1 も H_2 も基本的に語彙の特性（語音調）であるという解釈を採用してい

るが、いずれかが文レベルの特性（文音調）ではないかという解釈が出てくるかもしれない。つまり H_1 か H_2 の一方だけが語の特性であり、他方は文レベルで導入される境界表示音調（boundary tone）ではないかという解釈である。

たとえば、 H_2 は語彙的な特性であるが、 H_1 は文節の始まりを表す境界表示音調であるという見方も可能である（Larry Hyman 私信）。これは、上村（1941）が記述した70年前の体系において H_1 が2拍目に固定的に表れていたことと符合する解釈であるが、その一方で、非文末位置において H_1 の実現範囲がアクセント型（A 型と B 型）の区別に役立っているという（37）の事実を説明できない。アクセント型の区別は語彙的な特性であるから、 H_1 がこの機能を果たす限りは語彙レベルで導入されていると考えるのが妥当である。歴史的にみると、文レベルの音調として体系内に発生した H_1 が語彙的な特性に変わったというのが妥当であろう。

これに対し、 H_1 の方を語彙的な特性とみなし、 H_2 を文レベルで挿入される境界表示音調とみなすことも論理的には可能である。しかしこの説も、単語の単独発話（あるいは文末文節）において H_2 の位置がアクセント型の区別に関与しているという事実を説明できない。また H_1 の実現範囲が H_2 に依存しているという事実も、この説に不利な事実となる。 H_1 が語彙的な特性であり、その実現範囲を H_2 が決定する限り、 H_2 も H_1 同様に語彙的な特性とみなすのが妥当であろう。

このように見てくると、現在の甌島方言では H_1 と H_2 のいずれも語彙的な音調であるとみなすのが穏当な解釈と思われる。

6.4 英語との比較

上で述べたように、 H_2 が H_1 の実現範囲を決定しておきながら文レベルで消失してしまうという現象は奇妙である。しかし、同様の現象が他にないかと言われるとそうでもない。英語やドイツ語などの強さアクセントの言語では、文レベルの発話で単語の主強勢が消えてしまうという現象（リ

ズム規則)が観察される⁹⁾。

この現象では、まず単語の主強勢より前に第二強勢と呼ばれる二次的なアクセントが実現する。これはリズムによって生じるとされるもので、英語では主強勢より2つ前か3つ前の音節に現れるのが一般的である。たとえば *Japanése* から *Jàpanése* というアクセント構造が作りだされる。ところがこの第二強勢を持つ語が文の中に入り、他の語句が後続するようになると、次の例に示すように語の主強勢が消えて(あるいは音声的に弱体化して)、第二強勢がその語の主要なアクセントとして残る(Lieberman and Prince 1977)。これは *Japanese* や *thirteen* の主強勢が後続する要素(下記の例では *péople*, *mén*)の強勢と衝突(つまり強勢の衝突, *stress clash*)を起こしてしまうため、それを解消するために起こると考えられている。

(39) *Jàpanése*—*Jàpanése péople*
thirteén—*thirteén mén*,

このリズム規則の現象は、上で見た甌島方言の H_1 消去現象と次の4点において似ている。まず、英語でも甌島方言でも、副次的なアクセント(第二強勢, H_1)は主アクセント(主強勢, H_2)とほぼ連動する形で起こる。第二に、文レベルでは主アクセントが消え、先行する副次的なアクセントが残る。第三に、この主アクセント消去現象は文末では起こらない。最後に、第二強勢を持たない語では、後続する要素の強勢と衝突しても主強勢が消えることはない(たとえば *thréè mén* が *three mén* となることはない)。

以上の類似点に立脚すると、甌島方言の H_2 消去は英語のリズム規則と同じように、後続する要素のプロミネンスとの衝突(H音調の衝突)を避けるために起こると見ることが可能となる。また、甌島方言において H_1 という副次的な音調(つまりは重起伏)が生じるのは、英語の第二強勢と同じようにアクセントの隙間(*lapse*)を埋めるためという見方も可能である。

その一方で、英語と甌島方言の現象間には相違

点もある。英語の第二強勢がリズムによって生じる文レベルの現象とされるのに対し、甌島方言の H_1 は前節でみたように語の韻律特性と見た方が妥当である。今後、英語のリズム規則との異同をさらに細かく検討してみる必要があろう。

7. 結び

7.1 まとめ

本稿では鹿児島県甌島打集落で話されている方言のアクセントを、鹿児島方言との異同を中心に記述した。また上村(1941)の記述と比較しながら、70年前の体系と現在の体系との比較を試みた。甌島手打方言は(i)2型アクセント体系(A型とB型)である点、(ii)A型とB型の所属語彙、(iii)単語でなく文節を領域として基本メロディーを付与する点、(iv)前部要素のアクセントを継承する複合法則を持つ点、以上の4点において鹿児島方言と共通している。その一方で、(v)一つの文節に複数のアクセントの山(重起伏)を持つ点と、(vi)音調付与に音節と拍の両方の単位を用いる点において、鹿児島方言とは異なっている。また喜界島中里方言とは(i)と(v)の2点において共通しているが、他の点では異なっている¹⁰⁾。(vi)は、鹿児島方言と喜界島中里方言のいずれとも異なるもので、甌島方言の特徴と言える。また6節で論じたH音調の消去現象もまた他の方言には見られない現象である。

7.2 未解決の問題

甌島方言のアクセントについては、未解決の問題も多い。まず第一に、甌島方言内部においてアクセント体系がどのような変異を見せるのかという実証的な問題がある。本稿では南端の手打集落の体系を紹介したが、他の地域(たとえば下甌島の他の集落、上甌島の各集落)との異同を明らかにする必要がある。このような実証的な研究と並行して、理論的分析も進める必要がある。とりわけ4節で述べた音節と拍の関係や、6節で論じたH音調消去は理論的にも面白い現象であろう。

さらには、アクセント以外のプロソディー構造にも視野を広げる必要がある。たとえば疑問文イントネーションを見てみると、甌島方言は鹿児島方言(木部 2010)と同じように、文末において積極的にピッチを下降させることによって疑問を表す(窪蘭 2011a)。A型とB型の両アクセント型について、音節構造なども加味しながら疑問文プロソディーの実態を明らかにする必要がある。

謝 辞

本稿は2011年5月21日に神戸大学で開催された公開シンポジウム「N型アクセント：原理と成立」で行った口頭発表「鹿児島県甌島方言のアクセント規則」を修正加筆したものである。貴重なコメントを下された方々にお礼申し上げる。本稿は科学研究費補助金基盤研究(A)「日本語のアクセントとアクセント類型論」(22242011, 研究代表者・窪蘭晴夫)および国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」の研究成果の一部を報告したものである。

〔注〕

- 1) 中甌集落は中甌島ではなく上甌島の南端にある。
- 2) ただし、「日が([ひが])」「火が([ひが])」のように助詞が続く場合には2拍名詞の単独発音と同じような区別がある。
- 3) 本稿では和語と漢語はひらがなで表記し、長音の表記も通常のひらがな表記に従う。たとえば十(とお)と塔(とう)は長音を含む同音異義語であり、同様に先生(せんせい)の「い」や「教師(きょうし)」の「う」も音声的には長母音を表す。
- 4) つまり上野氏(本特集)の言う「文節性」の特徴を持つ。
- 5) 正確に言うと、拍数とアクセント型が同じであっても、音節の構成が異なると音調が異なってくる(4.2節, 6.1節参照)。
- 6) このH音調消去現象が音韻的な消去規則なのか、あるいは音声的なレベルの弱化規則なのかは今の段階ではわからない。
- 7) 「…やねえ」は「…だねえ」の意味のA型語句。「よか」はB型の形容詞。「私」と「名前」はA型、

「花子」はB型の名詞である。

- 8) アクセントの山が一つしかない文節(つまり重起伏でない文節)では、非文末位置でもHが消えることはない。
- 9) この類似性はCarlos Gussenhoven氏に指摘していただいた。
- 10) 甌島方言は(iii)についても喜界島中里方言とは微妙に異なる。後者の場合、一つのアクセント型(上野 2002の「 α 系列」)では文節単位で音調が決まるが、もう一つのアクセント型(同「 β 系列」)では単語のレベルで高低の位置が決まる(窪蘭 2011b, 本特集の上野論文参照)。つまり、この方言は上野(本特集)のいう「文節性」は持っているものの、「系列化」の特徴は持たない。これに対し甌島方言は、二つのアクセント型(A型, B型)ともに文節性と系列化の条件を満たしており、文節が一貫して音調付与の領域となっている。

参考文献

- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般的特性について」平山輝男博士古稀記念会(編)『現代方言学の課題 第2巻』167-209, 明治書院。
- 上野善道(2002)「喜界島諸方言の付属語のアクセント」第4回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会(編)『世界に拓く沖縄研究』(沖縄大会), 290-298。
- 上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」本特集。
- 上村孝二(1937)「甌島方言の研究」『満鐵教育研究所研究要報』11, 319-348。
- 上村孝二(1941)「甌島方言のアクセント」『音声学協会会報』65・66, 12-15。
- 木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版。
- 木部暢子(2010)「イントネーションの地域差—疑問文のイントネーション—」小林隆・篠崎晃一(編)『方言の発見』1-20, ひつじ書房。
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房。
- 窪蘭晴夫(2011a)「アクセントとイントネーション—日本語の多様性」『人間文化』(人間文化研究機構)13, 11-16。
- 窪蘭晴夫(2011b)「喜界島南部・中部地域のアクセント」木部暢子他(編)『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究—喜界島方言調査報告書』(国立国語研究所共同研究報告11-01)51-70, 国立国語研究所。
- 坂口至(2001)「長崎方言のアクセント」『音声研究』5(3), 33-41。

- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』 学界の指針社.
- Goldsmith, John (1976) “Autosegmental phonology.” Doctoral dissertation, MIT. [Garland Press, 1979].
- Haraguchi, Shosuke (1977) *The tonal pattern of Japanese: An autosegmental theory of tonology*. Tokyo: Kaitakusha.
- Kubozono, Haruo (2010) “Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese.” *Lingua* 120, 2323–2335.
- Kubozono, Haruo (2011c) “Japanese pitch accent.” In Marc van Oostendorp, Colin Ewen, Elizabeth Hume and Keren Rice (eds.) *The Blackwell companion to phonology*. Vol. 5, 2879–2907. Malden, MA & Oxford: Wiley-Blackwell.
- Kubozono, Haruo (2012) “Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese.” *The Linguistic Review* 29, 109–130.
- Lieberman, Mark and Alan Prince (1977) “On stress and linguistic rhythm.” *Linguistic Inquiry* 8, 249–336.
- Myers, Scott P. (1990) *Tone and the structure of words in Shona*. New York: Garland Press.
- Uwano, Zendo (1999) “Classification of Japanese accent systems.” In Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the symposium ‘Cross-linguistic studies on tonal phenomena: Tonogenesis, typology, and related topics’*, 151–186. Tokyo: ILCAA.

(Received Feb 6, 2012, Accepted Apr. 26, 2012)